

俳人協会々報

1964年
7月
No. 8

第三回全国俳句大会

応募句五千句突破

協会主催・朝日新聞社後援の第三回全国俳句大会は、五月三十一日午後〇時半から、例年のおおひ、東京有楽町の朝日新聞社六階朝日講堂で開かれた。

定刻、安住敦氏の開会の辞で始まり、石川桂郎、藤田湘子両氏の司会で会が進められたが、三百余名の参加者のうち、女性が百余名あり、第三回を迎えた着実な歩みと相俟って、終始、落着いた雰囲気であった。

〇時四十分、水原会長より別項のように挨拶があつたが、俳壇の進むべき道、協会の任務などを、説いたのが印象的であった。ついで、秋元事業部長が、今回の作品募集の要領、応募作品の詮衡経過、受賞作品の紹介を行ったが(別項)、応募数が依然として五千句を越え、受賞作家が全国各地に涉っていることは、本

大会が逐年発展している証拠であろう。

呼びものの講演は、平畑静塔氏が「東京の季題」と題して四〇分、小憩後、山本健吉氏が「俳句難感」と題して五〇分間におおひで行なつた。講演要旨は別項のとおりである。静塔氏の「自然のめぐみのない所にも有季俳句は生れる」。「自然の恵みの豊かな所では、却って自然の恵みを感じる事が難かしい。東京というジャングルの中でこそ、自然と人間との連関を感じる」などの発言が、聴衆の耳を打った。また、健吉氏の「自然と直接ぶつかって句を詠めば、歳時記にない言葉も使われる筈だ」。「俳人は自然認識に秀いでいなければならぬが、今では歌人のほうが広い見識を持つ」。「俳人が創作した歳時記が欲しい」などの言葉は、俳人の努力を要請した有益な発言であつた。

た。

引続き応募作品の講評が、水原秋桜子山口青邨、平畑静塔、石塚友二、角川源義、皆吉爽難、大野林火、中村草田男の八選者(発言順)によって行われた。各講師のおおひの五分ぐらゐの特選句についての短評であつたが、要点を握んだ見識を聞くことができた。なお、参加した選者のうち、福田蓼汀、石川桂郎、岸風三樓、香西照雄、秋元不死男、安住敦の諸氏の講評は、時間の都合で省略された。

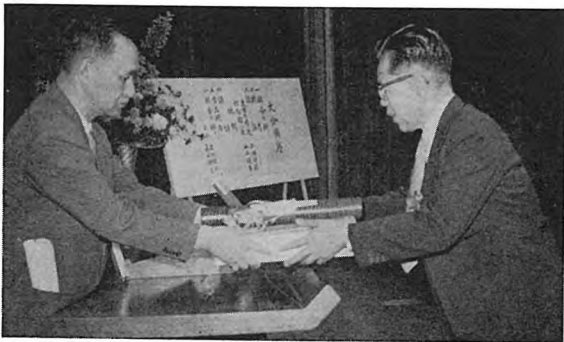
講評終了後、賞品授与式に移り、水原会長から、朝日新聞社賞が和歌山県の山本衣作氏へ、全国俳句大会賞が徳島県の那唯秋(代理)、宮崎県の橋本草郎、神奈川県金子理春(代理)、静岡県山本紗草の四氏へ、それぞれ、満場の拍手のうちに手渡された。また、選者の特選三句に対する各選者揮毫の短冊は、受付で受賞者に渡された。

かくて、大会の行事は盛会裡に終り、午後四時、福田蓼汀氏の閉会の辞を以つて会を閉じた。

なお、引続き五時から、有楽町の富士

アイズで、受賞者五氏を囲んで、選者、大会役員が夕食を共にして歓談して受賞者を祝い、かつ激励した。席上、今回の大会を回顧して、この有意義な大会の参加者を増すための方策として、大会直前に新聞社の社告を出してもらふこと、各結社誌は作品募集記事ばかりでなく大会の予報も出すこと、第五日曜日は勤め人に支障が多いことなどが話題になった。(以上庄中健吉記)

なお六月十一日の朝日の学芸欄に角川源義氏が、「第三回全国俳句大会を終えて」と題して、応募数の増加と受賞者が全部地方俳人だったことが、伝統俳句の底辺の広がりを感じさせたと書いた。



水原会長より朝日賞を受ける山本作氏

会長挨拶 (要旨)

水原 秋桜子

第三回大会に際しまして、講演者の紹介を兼ねて、一言御挨拶申し上げます。山本健吉氏は二十年前頃は、俳句批評をしておられ、今は文学の評論家として、たいへん活躍していられることは御承知と思ひます。しかし、山本氏は俳句のことはいつも気にしてはしまして、「芭蕉」といふ本をごらんになればわかりますがいろいろの文献を当った上で、それらを頭の中で整理して「眼光紙背に徹す」という形容が、そのまま当るような批評をしてはいます。実に、頭のいい方だと思ひます。平畑静塔氏は、御承知の通り、科学畑出身でありますから、論理が非常にたっております。だいたい俳壇人は論理をたてるということをしなない。私などはしない方の大将ですが、平畑氏は非常に論理がたっておりまして、これはやはり頭脳が明晰でなければできないことだと思ひます。

両氏の話を聞くと、どういう役に立つかということですが、今の俳壇で一番の欠点は、意味の分らない句が多いことです。昔はそういうことがなく、どんなに工合の悪い俳句でも、意味だけはすく通りました。私の初学時代にも大衆の俳句にはピンからキリまであって、まずい俳句もたくさんあったのですが、どんなまずい俳句でもわけが分らないというものはなかったのです。この頃のわけの分らない俳句にもいろいろあり、文法の素養がないため分らないものもあり、或は西洋の新しいものにかぶれて、何を言っているのか分らない句もあります。そういう句には選者なども、非常に苦しみます。その弊害を直さなければならぬ。これも我々の俳人協会の大きな仕事の一つだと思ひます。また、今度俳人協会会員の合同句集ができます。これなども、そういうわけの分らない俳句から、はっきりわかる俳句に世の中の俳句を変えてゆくために一つの役目を果たすと思ひます。あなた方はこの大会に出席し、また投句されていますから、もちろんわけの分らない俳句など作られるということはないと思ひますが、それでも二氏の講演を聞かされると、大いに啓発されて、あなた方の周囲にいるわけの分らない俳句や無季の俳句を作る人たちと、議論し、考えの違いを話しあう時の参考になるのではないかと思ひます。それで、最後まで皆さんが傾聴されることを願ひします。

今回の第三回全国俳句大会に寄せられた投句は、総数五、三三八句に達しました。これを全選者(二十二名)により第一次選考を行なうことに決め、四月十一日から翌十二日にかけて、東京青山のNHK青山荘に集まりました。その内、都合で出席の出来なかつた選者がありまして、次の諸氏により第一次選考を行なつたのであります。

中村草田男・大野林火・皆吉爽雨・角川源義・香西照雄・石川桂郎・石塚友二・安住敦・岸風三樓・福田蓼汀・秋元不死男

以上十一選者が、全投句に目をおし一三三句が予選を通過。これを改めて全選者に廻附。入選二十句。特選三句を標準にして本選をいたしました。

その結果が本日お手元に差しあげました入選作品集の印刷物であります。のちほど、これら入選・特選句に対する講評がありますので、清聴をお願いします。

ここで一言、申し添えますが、今回の応募は前回の春季雑詠の規定を踏まらず「当季雑詠」としたことであります。前回では「春季雑詠」の中に冬季の「雪」の句が相当あり、中には立派な作品もあったのですが、規定外だったのでこれを除外せねばならなかつた事情もありました。何人か、全国からの投句ですと、季節の移りかわりが微妙な時季ですと、北と南では季節のずれがあり、暦の上では春なのに、まだ季節は冬型——という

地方もあるわけです。そういうことを考慮いたしまして、今回は「当季雑詠」の規定を設けました。即ち初め朝日新聞に募集広告が載つた一月十五日から、切の三月末日まで、この期間を当季とする考えに拠つたのであります。従ひまして入選作品集には冬季・春季の作が発表されております。

尚、選句の内、高浜年尾氏の選句には特選句がありません。これはご本人の希望でそういたしました。

最後に受賞の標準は最高点を得た作に朝日新聞社賞を、入選特選を勘考して高ポイントに四位までの作に全国俳句大会賞を贈ることに決定、その成績はお手元の作品集に発表してあるとおりであります。のちほど、これら諸氏に賞品が贈られることになっておられます。来年も、やはり今回と同様時期に第四回全国俳句大会を当地で開催する予定にしておりますことをつけ加え、入選までの経過報告を申しあげました。(以下五頁よりつづく)

○仁村美津夫氏著「おどり百景」(東京書房、千三百円)を五月に刊行。
○小山白樞氏の句碑が徳島市の眉山山頂に「祖谷」の誌友によって建立された。
句は「畦をゆく親子遍路に阿波ひろし」

○東佐那絵氏は日本ペンクラブ会員としてオスロで開催される国際ペン大会(六月二十一日—二十七日)に出席、八月帰国の予定。

○三十九年度万緑全国大会は八月一日—三日、長野県湯田中温泉で、鍛錬句会を兼ねて開催予定。
○故竹下しづの女句文集を渋谷区宮下町三七の星書房(振替東京五二七七三)より既刊。定価五〇〇円。

○香西照雄氏句集「対話」を近刊予定。
○富安風生氏勲二等瑞宝章を贈られる。

選句経過報告 (要旨)

秋 元 不死男

会長の挨拶につづき、入選までの経過報告を申し上げます。

講演要旨

東京の季題

平畑静塔

私の考えを理解してもらうため、東京の春夏秋冬の五つのシーズンから一句づつ例句を挙げて話を進めていく。

一樹なき小学校へ吾子を入れぬ

石田波郷

これは東京の季題のテーマに示唆を与える作品。庭に一本一草もない居住者がいとし子の入学式に列席すると、その学校には一樹もなく鉄と石でできた無味乾燥の校舎——ここが六年間わが子が教育される場所かと思えば、わが子のいとしさがわが子の不幸不運を嘆かずにはいられない。日本の大都会の一樹もない下町の乏しい生活の中からもこういう俳句が生れるということを示した句だ。自然の恵みの欠如を逆手に取れば有季俳句が生れる例として、私はこの句に快心の喜びをおぼえる。

渇水期卵色なる電気点く 石塚友二

この渇水期は真夏と考える。卵色の電気は恐らくタンングステンの電気であろう。渇水期の暑さで喘ぎ、イライラしているところへ救いの色のクリームイエローの卵形の電燈がポーンとついたという句でヤレ、ヤレという安堵の気持がある。水の欠乏——東京という空気に次ぐ天の

恵みの乏しい場所に住むややうらぶれた人間の有季俳句。

真横へと走せし流星地に疎し

中村草田男

この句は、東京という土地にもっともふさわしい。流星が突如異変のように人間の視界に映る。それが流れるとか落ちるとかという歳時記的な形でなく、真一文字に横に疾走した一瞬のいきさよき——大きく言えば宇宙間の大きな連行の現象——地上には疎遠な然しいきさよい神秘的な造化の現象これを仰ぐのは東京なればこそである。ネオン輝き、善悪二つがこんがらかって進行している大都会の秋の夜に立ってこそ、目に映る流星の勇敢な清潔な動きが「地に疎し」という感覚で感ぜられる。同じ作者の「寒星や神の算盤ただひそか」同様この作者独特の宇宙観が読みとられる。

しぐるるや駅に西口東口 安住 敦

昔の東京駅の赤煉瓦の感触がこの句を支えている。駅に西口あり東口ありという即興的な回顧的なしみじみとした発見——そしてほろ酔いの気持がこの句の基調である。一つの東京季題。

元日を白く寒しと昼寝たり 西東三鬼

神戸の山の手で生れた戦後の正月詠だが、元日の白々とした明るい昼、そこにくたした寝の枕を並べた市民生活現在の東京生活を浮彫りしたような句だ。「白く寒し」は戦後の荒寥とした気持だが、これを東京の元日をもって来ると、もっと普遍化した市民感情、もっと現実そのまの切ない感懐として生きかえっている。東京の自然は年々圧迫され逼塞されている現状で、将来ますますこの傾向が強まって、有季俳句が登場する価値があると言われる。然しこれは現象面にのみ引きずられたプラグマチックな議論で、俳句の近代化を生む本当の詩論でない。これでは無季俳句は真の実りを得ないと断言してはばからない。私は無季俳句の場はむしろ都会を離れて、季節の区切りがハッキリと原始的にまでリズム正しく展開している未開の田園または山奥においてであると思うが、その問題は今ここでは省略する。

いずれにしても、東京の季題は人工文化の進出と、自然の追放のため、質量ともにマイナスの方面に進み、東京の有季俳句作家は東京を離れなければ俳句は作れないというジレンマに陥っている。然らば、東京の有季俳句作家は、東京という大都会を無季俳句の俳人に明け渡して自分達は郊外へ行ってよいのか。私はそうは思わない。私は東京の季題について次のように考える。

問題を季題に限っていうと、有季俳句

作家は季題即ち自然、自然即ち季題と考え過ぎていてのではないか。たしかに自然現象は季題、季語の宿る最大の場所である。然し季題そのものは、自然そのものから発生したものでなく、自然が消滅したら季題がなくなるというものでない。私は季題季語は自然以前の存在から発生していると思う。極端に言うところ、地球が自転、公転しているという炳たる事実——それが季題の発祥なのだ。人間が地球上に発生して、色々の生活を営むようになって人間の知恵が出来た。その知恵から、季節という一種の時間の流れを意識し、言葉を作って人間同志の意志を伝達するようになり文学の発達によって季語というものができた。それが俳句の世界では季題、季語として登録されて、公的な性格を持つようになったのだ。この公的な性格のため季語は敷衍されたが、そのため逆に、個人に対する浸透力は弱まって来た。それは人間の心理上しかたのないことである。然し人間がいかにその公的な性格を軽んじ無視しようとも、その根本にあるシーズンというものの、季題というものの、人間のよって立っている地球の生命のリズムというものを、無視することは絶対に不可能である。つまり季語以前の世界——季語として登録しない以前の世界——宇宙のリズムそのものについては、東京といえども、或いは東北の山奥といえども変りはない。むしろ東京というマンモス大都会、人口ジャングルの

中であつてこそ、俳人はそれだけ自分の生活のリズムの意識、それを包んでいる公的な宇宙のリズムとのかかり合いを、より強く感受し得べき場所だと私は思う。そう考へると現象としての季語の世界の変化―現象としての季語の自然の世界の変化―つまり自然の黄昏はそれほど苦にならない。ドイツの飛行船ツエツベリン号が昔日本に来た時、高浜虚子先生は丸ビルの窓から「ツエ号の飛び来し圓の盆の月」と悠々うそぶき、東京の六百万の人間の中で、盆というシーズンに對する人間の不屈の意志を示された。東京

講演要旨

俳句雑感

山本健吉

ジャングルは、有季俳句にとつて決して悲観すべき不毛の地でない私は愛する東京の有季俳人各位に向つて言いたい。

近頃三好達治氏とか、佐藤春夫氏といった、すぐれた詩人が次々に亡くなられたことは、日本の文学全体はもとより、俳句界にとつても非常に悲しいことで、哀惜の念に堪へない。佐藤氏の短歌は「戸によりて築紫女の言ひけるは東男のうすなさけかな」「見かへりて東男の言ひけるは築紫女のうすなさけかな」というように、素人じみたしかも才気喚発、非常にウィットのきいた軽い戯れのものだが、死の直前に作られたビーナスの俳句も「鬚深くすみれ色なるおへそかな」「宝石のときおへそや春蘭けぬ」なか

どいにも佐藤氏らしい軽い味をもつたものでこういう天真爛漫の俳句はなかなかできない。専門的な見地からはいろいろ文句はあると思うが、私はこういう俳句がもっとあつていいのではないかと思う。今日の俳句人口は百万人といわれるが、結社に屬する一部の達人を除く大衆は、門外漢、初心者或いは俳句を折り折りに生活の楽しみをなかへ織りこむというような読者で、私はそういう人達の心を強くゆさぶるのが俳句だと思ふ。それだけ俳句は日本人の胸に深く浸み通つてい

神田秀夫氏が「俳句」に書いてある「自然観の麻痺」という文章は、核心をついていて面白いと思つた。俳句は昔から「花鳥諷詠」で、季節季語を詠みこむことが認められていた。それに対し荻原井泉水一派が昔無季俳句を称え、最近でも有季、無季の論争が起つてゐるが、排気ガスのため私達の身体は毎日損傷され河水の汚染のため生命はむしばまれ、スモッグのため俳句の存立条件が都会にあつて冒されてゐる。日本の社会はあらゆる面で進歩したけれども、自然観は麻痺してしまつた。俳人達がいかに論争し主張しても、これでは俳句が根本から脅かされ、俳人達の背後にある自然観が危機に瀕してゐる。これに對して俳人側はなぜ抗弁しないのか、と神田さんはいろいろ列挙して、俳人を大声叱咤してゐる。私達が自分から進んで獲得しないかぎり自分達の周囲には自然というものがなくなりつつある。それでなほかつ十七字が存立するか。「スモッグで一句やりましう」なんてのんびりしていられるか。未来のことを卜することはできないが、私は日本人がこれまで俳句に感じていた魅力が、かなり損われてくると思ふ。

日本の自然観は明治以後ぐんぐん變つてゐる。今の歳時記には雪溪、雲海、高山植物等高山に關する季題をいろいろ見出すことができるが、昔の俳句は一種の室内芸術で、宗教的な登山はあつたけれども、今のようにレクリエーションとして登山はなく、俳人等も今のよう

旅行しなかつたので、そういったものは余り詠まれていない。それが俳人の目につき出し、俳句の対象になり出したのは大正末期から昭和にかけてである。

文学の方では国木田独歩が二葉亭四迷訳の「獵人日記」や「あひびき」に感動して、ツルゲネーフ流の風景描写を学び、新しい感覚で、武蔵野の美しさを描いた。これは日本人の自然観の一大進歩であり拡充である。その線に沿つて明治以後の日本の自然観は拡充され、避暑地としての軽井沢の美しさ、日本アルプスの高山の雄大、美、溪谷の美観等、これまでの箱庭式のと全く變つた風景が現われて来た。絵画の世界では印象派の影響を受けて、外光の下に風景の印象を描き出す画風がずっと以前に移入されていたが、そういう風潮の中に「白樺」が発刊されその他いろいろの紀行文や小説、詩、短歌にも新しい自然が詠まれ出した。然るに自然認識の芸術である俳句で、新しい自然の発見が一番遅れていた。そこへ現われたのが大正末期の水原秋桜子氏の「葛飾」で、これは非常にくすんだこれまでの箱庭的自然観に對する一大革命である。水原氏は日本人の風景観を明るく外光のもとに引きずり出した。わびとかさびとかフィルターがけの日本人の自然観を、大胆に外光に照らして、自然そのものと対決しようとした点が、水原氏の俳句史における功績である。つまり遅れ

を取り戻したのが水原氏以後の俳句だが水原氏も山口誓子氏の俳句も、初期においては新興俳句と言われ、その影響は若い作家にも及んだ。以上述べたような自然の発見をした葛飾以後の俳句運動を継いで、今後その発見を更に修正し、拡充してより高度なものに消化して行かなくてはいけない。

私は俳句は挨拶であり滑稽であると言っているが、俳句を方法的に考えるとそこへ行くと思う。俳句を存立させるためには自然現象季節現象に支配され、その中で自分の生活を、それにマッチした生活を営んでゆかなくてはならない。日本人の生活の長い伝統の知恵が自然観として現われるだらうと思う。今日のわれわれの生活では季節感覚が動揺し、人類全体が自然を征服して来ている。征服というよりも、自然をなだめすかしながら自分達の欲することを承認させる方向に向いて来ている。これは昔からそうなので、昔の人は山とか川とか森とかに、精霊とか神様のようなものがいて、人間は自分達の幸福のために神々の気持をなだめすかさなければならぬという気持があった。万葉集末期のものとは別として、大方の歌は自然に対する畏敬が根本にある。日本人の自然観はそういったところから発達して、柿本人麿、大伴家持等が諸国旅行によって、未知の自然に対する叙景歌を発展させた。明治以後にはこれまで発見されなかつた自然の美しさや自

然の尊厳さが発見されるのに至り、日本人の自然に対する感覚が磨かれて来たわけである。十七音は小詩型だから瑣末主義に流れやすいが、一つ一つの草の芽や昆虫だけでなく、もっと大きな観点から日本人の自然観を一步一步前進拡充させる使命が俳人達にあるのではない。

今度角川書店から出た歳時記は、写真もあり、季題の網羅数も空前絶後だらうし、解説も各方面の学者を動員して良書だと思う。しかし歳時記は自然現象を分類分析した単なる自然の研究書でなく、俳人達を中心にした日本の自然の創造図である。千年以上の間に積みあげて来た日本人の美意識、或いは日常の知恵の集大成それが歳時記で、春なら花、秋なら月、冬なら雪というように歳時記の中心になる季題がある。そうした季題について、日本人が短歌、連歌、俳句の上で長い伝統の間に蓄積した認識がある。歳時記を作るために自然科学者の意見は大いに聞くべきだが、こうした中心季題の解説は科学者にまかしておくわけにゆかない。飽くまで俳人がやるべきだ。それなのになぜやらなかつたのか。歳時記の内容が複雑になって来たのなら、学者を参考にしながら俳人が自信をもってそれを整理するべきだ。それをやっつてこそ、初めて俳人が自分の自然観を俳人以外の自然愛好者に問うことができ俳人の自然観が更に進展の度を深めると思う。

▽消 息 △

到着順

- 五月、原石鼎氏の墓碑が建立された。
- 三月、京極杜藻氏(鹿火屋)がハワイ・ジャワ・香港を巡遊された。
- 六月十四・五日に玉藻四百号記念大会の行事として、たまたも丸での東京湾内周遊と、鎌倉寿福寺での記念俳句大会があった。
- 七月十八日―二十日、玉藻社では千葉県鹿野寺で幽塚供養並びに夏稽古会を開催の予定。
- 六月十三日、第四十五回雪解研修会が奈良で行なわれた。
- 五月二十四日、市川市手古奈境内で来賓岸風三樓・阿部脩人・河野南畦の諸氏を始め八十名の参列のもとに、吉田冬葉句碑除幕式が行なわれた。なお瀬祭六月号は「冬葉句碑建立記念特集」の予定。
- 第七回雲母賞(二月号発表)が山中月鈴子氏に第三回雲母寒夜句三味賞(五月号発表)が雲母佐世保支社に授賞された。なお雲母では年間最優秀賞作家(一名)に授与する山廬賞を新しく設定。
- 五月十七日、渋柿では野村喜舟氏の喜寿祝賀松山大会を開催した。
- 六月二十七日、八日、渋柿六百号を記念両毛大会を栃木県大平山麓大中正寺で開催予定。
- 徳永夏川女追悼号(渋柿六〇二号)刊行。
- 休刊中の「風土」は七月より石川桂郎氏主宰で再発行の予定。
- 七月十八・九日「天狼」夏のキャンプを信貴山寺宿坊福院で開く予定。
- 山口誓子氏句文集「湯の山とその周辺」刊。(発行所、三重県菰野町観光課)
- 第四回スバル賞を右城暮石氏が第十五回天狼賞を藤本節子氏が受賞した。
- 春燈主催の久保田万太郎一周忌追善句会が五月三十日、故人にゆかりのある浅草伝法院で開かれた。関西方面からの参加もあって盛会。
- 五月二十四日、久保田万太郎一周忌句会(三滝多宝塔奉讃会主催)が故人の句碑のある広島三滝観音境内で行なわれ、東京から中村汀女氏、安住敦氏地元から木下夕爾氏が出席、他にいと句会から宮田重雄氏が出席し、盛会だった。
- 七月四・五日、水郷潮白帆荘でかびれ、夏季錬成俳句大会を開催予定。
- 藤本寿秋氏入院、左肺切除後経過良好七輯として刊行。
- 七月二十五日、河全国大会を、二十六・七日鍛錬会を、建長寺で開催の予定。
- 松野自得氏の句碑が昨年十一月十日磐梯高原湖畔に建立除幕された。句は「松原湖は暮れて磐梯月に聳つ」
- 一月十九日、さいかちの新年俳句大会を自白の椿山荘で開催(六十余名出席)
- 八月三・四日、さいかちの夏行大会を群馬県川原湯温泉で行なう予定。
- 菊池麻風氏の句集「春嵐」を五月二日刊。B6一五三頁。故佐野青陽人氏句集七月上梓予定。
- 五月十七日、曲水中京大会を熱田神宮参集所で開催した。
- 五月二十四日、曲水では室戸句碑再建一周年記念式並に俳句会を高知岬ホテルで開催した。
- 四月二十六日、みちのく年次俳句大会を仙台市公会堂で開催した。選者は阿部みどり女・永野孫柳・佐藤鬼房・遠藤梧逸の諸氏。
- 第一回みちのく賞を下斗米八郎氏が受賞した。(二頁下段へつづく)

◎お願い◎

本年度会費(千納)未納の方は至急納入下さい

◎朝日新聞社賞

夙あがる

紙漉村の狭き天

和歌山県 山本 衣作



主人坂口勝蔵の霊前で賞品と賞状とを
披いてゆっくり拝見いたしました。大正
九年春、十三歳丁稚として坂口商店へお
世話になって以来理解ある主人の下で俳
句と習字を楽しむ事のできた私は全く倅
でした。「文武両道の人に成れ」との励
ましの言葉に甘えて時には店の仕事を疎
かにするようなこともあったが、「文武
いずれに重点をかけているかは自分で判
断せよ」と言って下さる程度。四年前こ
の主人を亡くした時には両親を見送った
時よりもとめどなく涙が溢れ出た。

この度図らずも入賞の光栄を得た句は
時代の波に押されて年々寂びれてゆく紙
漉村の現況を読み聞きしている折も、か
つて戦前高野山へ出張の途次、山腹古沢
の紙漉を見聞した情景を思い泛べて口遊
んだものである。霊前での開披はたとへ

ままごとのような仕事でも自營の今日、

文武の道を教えて下さった亡き主人にこ
の光栄を見ていただきたかったからであ
る。けれども十年余の間指導して下さっ
ている「けいてき俳句会」小野田凡二先
生へは御見せしに行きはしなかった、
「一句が賞められたからとてさわぐよう
では人間が小さい小さい」と言われそ
うなので。

(俳歴) 十五歳で宗匠俳句入門、「鹿
火屋」に所属。戦後は「雪解」、現在「天
狼」「岬」「けいてき」に在籍。

◎全国俳句大会賞

憩ひたる

石に合掌 遍路発つ

徳島県 郡 唯 秋



吉野川の北岸阿讃山脈のふもとを東か
ら西へ四国の霊場一番の霊山寺から十番
切幡寺までの札所が十里の間にある。こ
れを十里十ヶ所と云って旧三月節句前後
をピークとして一泊二日の予定でお参り

に出るのが普通である。一県だけ廻るの
を一国巡り、全部巡るのを本四国と云っ
てゐる。全国からも沢山のお遍路さんが
押かけてくるのもこの頃である。私は今
之香の札所金泉寺の近くに住んでいるの
でお遍路さんの動向がよく解る。今の遍
路は貸し切りバスの団体が多い。中には
タクシー又は自家用車族がある。そして
服装もまちまちだ。白衣に笠、ずだ袋に
札差、傘に杖といった姿は少ない。それ
でも戦前のような本当のお遍路さんが時
々見られる。弘法大師の御足跡を慕うて
金剛杖を便りに鈴の音を流しつつ南無大
師遍照金剛と、唱えつつひたぶるに仏心
を得んとする遍路、そのお遍路さんを句
に読みたかった。第二回大会に投句した
遍路の句は、予選で没になった、今年は
せめて予選だけでもと思って投句したの
が、図らずも入選し大会賞を得た。私の
一生を通して忘れることのできない、大
きな喜びの一つとなることだろう。

(俳歴) 子供の頃より俳句を好み、新
聞雑誌の俳句は必ず目を通し、地方の句
会に努めて出席、数年前より海郷に入会
佐野まもる氏に師事。天狼には三十七年
春より投句不勉強のため万年一句記。

◎全国俳句大会賞

寒卵 煮み

遙かなる 貌をせり

宮崎県 橋本 草郎



はからずも全国俳句大会賞を受賞し、
幸運であったことを喜んでいきます。何よ
りもまず、特選三句を選んでいただいた
角川源義、安住敦の両先生、並びに入選
二十句を選んでいただいた長谷川かな女
秋元不死男、中村汀女の三先生にお礼を
申しあげます。昨年の大会では私の「東
風の母発車のきはにも言ひだす」が、
中村草田男、石川桂郎両先生の特選を得
中村汀女先生の入選を得ながら、惜しく
も入賞を逸しました。今後の採点の方法
として特選を二点入選を一点に数え、同
点の際は特選の多い方を優位にするとい
うのも一つの方法かと存じます。受賞
者の祝賀パーティの席上、秋桜子会長か
ら「大会賞受賞者の活躍をいつも見守っ
ているのだが」と激励されましたが、今
後とも精進して、御期待に応えたいと思
います。私は一俳句愛好者として自分の
信じる句を究め、作品を大会の先生方に
評価願いたいと投句したのですが、今こ
こに受賞して、所属誌ということを考え

てみますと、俳人協会の外側にあったことに思い至り、何か悪いような、一抹のうしろめたさが残るのをどうすることもできませんでした。私の考えすぎであれば幸いです。

(俳歴) 昭和四年宮崎県都城市に生る。二十七年高松雀村先生により俳句入門、地元の大先輩、藤後左右、山口聖二先生の影響を受けた。現在「冬草」同人「寒雷」準会員。郷土誌「権の実」「鏝」同人。銀行員。

◎全国俳句大会賞

流れては

また太陽にすぎる蝌蚪

金子 理春



俳句は私生活のもっとも美しい尊い日記であると思われ、そうした考えの中より詠われてきた私の俳句が俳句としての程度の価値があるかわたしは知らない。だが情熱をかたむけてひたすら真実の諷詠につとめてきたことだけは事実である。わたしは今回のこの受賞の栄光を

基盤として、いかにこの道が涯しなく険しくともうまずたゆまず勉強を続けてゆき、諷詠の上にあらためて自信にみちた一步を踏出すべく意欲にもえている。

(俳歴) 昭和八年この道に入り昭和十三年療養生活中、故目追秩父氏を知り指導を受ける。同年より「浜」に入会この間秩父氏主宰の「千尋」同人。

◎全国俳句大会賞

田の溝に

小鮒ひらめき春祭

静岡県 山本 莎草



私の拙い作品が選ばれて、全国俳句大会賞を受けるなど考えてもいませんでしたので、俳人協会からの御通知に接したのも喜びと感激でありました。浜名湖畔の小さな町に住んで工場勤めの私は朝夕の美しい湖のながめにはめぐまれてはいますが、さて句を作るとなるとなかなか思うようにはゆきません。それでも好きな俳句は捨てられず、一進一退細々と

秋桜子氏に芸術院賞

二三〇名出席の盛大な祝賀人方

つづけてはいますが、浅学非才、この頃の新しい表現や難しい内容の句はとてもし作れそうもありません。これからも諸先生方の御指導により作句の道の勉強をつ

づきたいと思えます。

(俳歴) 昭和二十三年作句をはじめ馬酔木に投句以来馬酔木、海坂に所屬、秋桜子、羽瓜瓜人諸先生の指導を受く。

日本芸術院は四月十日、昭和三十八年度(第二十回)の日本芸術院恩賜賞と、芸術院賞の受賞者を内定、発表したが、水原秋桜子氏も、俳句における長年の業績が認められ芸術院賞を受賞した。なお受賞式は五月十九日、東京上野の日本芸術院会館で天皇陛下をお迎えして行われた。

水原秋桜子氏の第二十回日本芸術院賞受賞祝賀会は、五月二十三日五時から俳人協会と馬酔木会の共催で行なわれた。

当日は俳人協会関係ばかりでなく、現代俳句協会からも高屋窓秋、赤城さかえ、田川飛旅子氏等多数の参会者があり、総勢二二〇名、最近まれに見る盛会となった。このため、会場の丸の内会館はむれかえるような暑さとなった。その中で、まず富安風生氏が立って音頭をとり全員

で乾杯、つづいて山口青邨、山本健吉、井本農一、角川源義、宮柵二、中村草田男、皆吉爽雨、滝春一、石田波郷の諸氏が次々に演壇に登り、秋桜子氏の業績と讃え、思い出話を語った。

この間に、型どりの祝電の披露、花束贈呈等があり、最後に秋桜子氏が立て「私はむかし、人相をよく見る人から七十過ぎてよいことがあると言われた。そんなわけで、さきほど誰かが、今回の受賞は遅過ぎると言いましたが、私はむしろ早過ぎたと思っています」といった趣旨の挨拶をされた。例によってユーモアたっぷりの話しぶり、当日の主賓にふさわしい貫録であった。最後に、秋桜子氏とは独協中学時代からの親友で、馬酔木同人の金子伊昔紅氏の発声で万才を三唱、華やかな祝賀会の幕を閉じた。

◇協会専用私書連絡函◇

東京都渋谷郵便局私書函三十一号 俳人協会